

テ遂ニ斃ル、ナリ、

〔閑窓自語〕廣南國貢象事

享保十四年、廣南國より象をわたし、術をき、しに、このけものきはめて鼠をいむゆゑに、舟のうちにはほどをはかり、はことごときものをこしらへ、ねずみを入れ、うへにあみをはりおくに、象これを見て、ねずみを外へいさじと、四のあしにて、かのはこのうへをふたく、これに心をいるゆゑに、數日船中にたつとぞ、玄からざれば、このけもの水をもえたるゆゑに、たちまちうみをわたりて、かへるとなむ、さて象本朝にきたる事、應永十五年、南蠻よりくるき象をわたす、この外例見えず、黒象別種なり、このたびの象は灰色なり、白象にはあらず、

召覽象於内院事

同年四月、象を宮中にめし入れて、中御門院御覽あり、臺盤所のまへに引くとき、象まへあしを折りける、ちく類といへども、帝位のいとたつときをまけむ、やむごとなき事なり、御製和歌に、時しあれば人の國なるけだものもけふ九重にみるがかなしき、のちにこの御詠草、故殿光臣の卿にたまはりて、もちつたふるなり、又この日靈元院法皇の御所にひかせて、御覽ありけるに、このたびは象かしらをたれて、恐れけるかたち見えけるとなん、御製やまとうた二首、
めづらしくみやこにきぎのからやまと過ぎしの山はいくちさとなる
なさけあるきぎのすがたよから人にあらぬやつこの手にもなれきて

〔江戸名所圖會 十一〕中野寶仙寺當寺に、享保十四年、交趾國より、馴象の枯骨あり、

馴象之枯骨

享保十三年戊申、交趾國より、鄭大威なる者、廣南に産る、所の大象牝牡二頭を率ゐる來て、本邦に貢獻す、林信言の事物權輿には、大泥國より來るとあり、同年六月十三日、長崎に著す、同十九日、上牝象は、同申年九月十一日、長崎に於て斃せり、